

## IIコリント五・六bを巡る問題

田代英樹

### 一 IIコリント五・六bはパウロの主張か

我々がIIコリント五・六一九を読む際、ἐπιποθῶντες ἐν τοῖς σὺναιμαῖς ἐκζητοῦμεν τὸν κύριον「身体のうちに住んでいる者は、主から離れている」(IIコリント五・六b)という叙述をパウロ独自の主張とするか、それともパウロがコリントの人々の主張を引用したものと捉えるかでIIコリント五・六一八の主張は全く異なったものとなる。IIコリント五・六bが誰の主張であるかを巡っては、I・IIコリント書を包括的に扱わなければならず字数の制限もあるので今回はTheologisches Wörterbuch zum Neuen Testament (以下ThW<sup>3</sup>と略記)においてIIコリント五・六bの ἐπιποθῶντες、ἐκζητοῦμεν に関する用例とその解釈にいくつか問題が見出されることを指摘したい。

まず、IIコリント五・六bがパウロの論敵の用いた語彙、或いは論敵の主張とする研究者の解釈を概観しておこう。六節の動詞「住んでゐる」(ἐπιποθῶντες)、「離れてゐる」(ἐκζητοῦμεν)が、パウロの論敵に由来する語彙であると最初に仮定したのは

Schmithalsであった。ただしSchmithalsはコリント教会の状況をグノーシスから解釈する傾向があり、「それらの語彙は、『彼ら(論敵)は、明らかに身体の内生きてゐるのだが、実際は主の内に生きてゐる』という論敵のグノーシス的主張を論駁するために、六節においてパウロの伝承に融合された」としている。コリント教会の論敵がグノーシス主義者であるというSchmithalsの主張は偏っているが、六節において、パウロが論敵の語彙を借用し、反駁の為に用いているという指摘は慧眼であろう。

青野氏も六節の εἰδοτες οὐκ 以下に論敵の主張の反映があると以下の根拠を挙げている。①六節の ἐπιποθῶντες および ἐκζητοῦμεν はパウロによつてここII五・六、八、九においてのみ用いられていること、②ἐπιποθῶντες、ἐκζητοῦμεν はヘレニズム的語彙であること、③パウロが ἐν Χριστῷ に留まることを言うことはあつても「主から離れている」ことを他の箇所では言わないこと、④六節以下の σὺναιμαῖς が「地上の身体」しか意味しておらずパウロの通常用法と異なること、しかもその用法はやはり論争的に語られているII一・二・三に於ける用法と合致すること。そして、εἰδοτες οὐκ 以下の文は、論敵が肉体の侮蔑と靈の強調の故に「地上の肉体にあるうちは主から離れている」と言っていたのをパウロが引用したものと結論付けている。

Schmithals は、動詞 ἐπιποθῶντες、ἐκζητοῦμεν を論敵(グノーシス)に由来する語彙であり、パウロは自らの主張にこれらの動詞を

組み込んだものと理解した。しかし、グノーシスが明確な形として確立するのは二世紀以降のことであり、I・IIコリント書にグノーシスの定義とされる反宇宙的二元論や人間の内部に「神的火花」「本来的自己」が存在するという確信、人間に自己の本質を認識させる救済的啓示者の存在に関する叙述は確認されないことからグノーシスを背景とするのは無理であろう。一方、青野氏は、*evhghēa*、*ekhghēa* を Windisch に従いヘレニズム的語彙としているがこれらの語彙はヘレニズム世界のどの著作者にその用例が確認されるかなど具体的な言及をしていない。

IIコリント五・六bは、コリント教会においてパウロの論敵が唱えたスローガンであると捉え、パウロは自らの主張の中に論敵のスローガンを引用しつつ逆に論敵の主張を反駁しているという視点から考察を試みている研究者に O'Connor がいる。彼は *evhghēa*、*ekhghēa* の語はアレクサンドリアのフィロンの著作とヘレニズムユダヤ教の文書『アブラハムの遺訓』にその用例が確認されることから、IIコリント五・六bの思想的背景にフィロンの影響があることを指摘している。O'Connor によれば、コリント教会の論敵は、「人は、身体を住みかとしていて限り真の美德から離れており、神からの疎外を意味する」、「徳は、しばしの間閉じられ、また盲目であった目を開いた」というフィロンの教説に影響され「身体のうちに住んでいる者は、主から離れている」(IIコリント五・六b) というスローガンを

掲げていたとする。それに対してパウロは、論敵のスローガン (IIコリント五・六b) に対して「目に見えるものではなく、信仰によって歩んでいるからである」(IIコリント五・七) と語ることで、パウロの論敵が彼を非難していた主張と立場を逆転させているとする。つまり、論敵が、死の事実が身体は無価値を証明するという見解をしていたのに対して、パウロはその姿勢は目に見える「うわべの姿」に基づいており、身体に対する真実の姿勢はキリストが彼の身体を通してなした死の救いと復活に対する信仰に基づくものである述べている。そしてパウロは論敵に対して、彼らこそ盲目の人種であり、彼らの自負する鋭い視力(洞察力)は、ただの自惚れであると反論しているとする。更に八節において、*evhghēa* *dytes* *ev* *tā* *ojhmatī* *to* *evhghēmatī* *pros* *ton* *khōrion* *to* *to* *ekhghēmatī* *ek* *ton* *ojhmatōs* *to* *ekhghēmatōs* *pros* *ton* *khōrion* と置き換えることによつて論敵のスローガンを作り変え、「現在」と「終末」という二つの状態を結びつける運動の概念を導入しようとしたとしている。

論者もIIコリント五・六bは、フィロンの教説に影響を受けたコリントの論敵が主張したスローガンであり、パウロはIIコリント五・六―八において彼らのスローガンを引用した上で反駁しているという読み方が合理的であると解する。ただし、そうであるならば、反駁の前提となるIIコリント五・六bの主張にはパウロも合意していたことになる。この解釈はパウロをパレスティナのユダヤ教の系譜に位置付けるか、それともフィ

ロンなどのヘレニズムユダヤ教の枠内に位置付けるかという議論となり紙幅の都合上詳細に論じることが出来ないが、私見ではパウロをパレスティナのユダヤ教の枠内から捉える見解は再考すべきではないかと認識している。例えば、Bultmann のように、パウロはパレスティナのユダヤ教の系譜に立ち、身体 (oia) は、身体だけを示すのみならず全人格をも表しており、II コリント五・一以下、一二・二一四においてパウロは身体を肉体的なからだとして軽視するヘレニズム的・二元論的な身体軽視に影響されている、とする理解がある。Bultmann の見解では、II コリント五・六一八においてパウロの通常と異なる oia の用法はヘレニズム的理解に影響されたもの、或いは変化しなかったものと解され、青野氏は六一八節におけるパウロのヘレニズム的な変化は終末の遅延、すなわちキリストの再臨まで生き残る確信が薄れたことに原因があると指摘している。このように、パウロをパレスティナのユダヤ教の系譜に当てはめると、パウロはII コリント五・六以下で本意ながら一時的に論敵の立場に立つて議論をしているか、またはパウロの身体観は終末の遅延によってヘレニズム的・二元論に変化していったという結論に辿り着かざるをえない。しかし、パウロはそもそもフィロンと同じヘレニズムユダヤ教の出身であるので、パウロをパレスティナのユダヤ教から捉えようとする方法論は一面的である。I コリント一五・四〇以下に、「天上の身体」「地上の身体」「霊の身体」「自然の命の身体」という対比があるように、

II コリント五・六bを巡る問題(田代)

パウロは当初からヘレニズムユダヤ教の二元的な身体理解をしており、パウロの理解では再臨前に死んだ者も霊的な身体を保持していること、再臨に与った者は「地上の身体」の上に「天上の身体」を着せられるというものであった。よって地上の身体は、パウロ、フィロン、コリントの論敵にとって克服の対象であり、パウロとフィロンの違いは、フィロンとコリントの論敵が死後における身体存在を認めなかった点となる。このようにパウロをヘレニズムユダヤ教の観点から理解すれば、パウロ自身、地上の身体に住んでいる限り主から離れているというスローガンに同意しつつII コリント五・六bを引用したことになるだろう。

一方、註解者の多くは、「身体のうちに住んでいる者は、主から離れている」(II コリント五・六b) という叙述がパウロ神学から逸脱していることは認めても、六一八節に論争的文脈、論敵の存在、ヘレニズムユダヤ教の影響があるということに関しては正面から向き合おうとしていない。例えば、Pummer は「パウロはII コリント五・六bを字義通りには語っていない」と字義通りに読むことを拒み、Barrett は「パウロはこの人生においてキリスト者はキリストから離れているということを意味しない。パウロはキリスト者がこの時代に地上に住んでいる限り、十全な意味で彼が〔その身体から〕離れた時のようにキリストと共に居ることは出来ない」とやはり字義通りには解せず「身体のうちに住む」という内容を「地上に住む」という意味に置

き換えており、ThaIIも同様の置き換えをしている。彼らはIIコリント五・六以下にコリント人のスローガン、論争的文脈、フィロンの影響を認めようとはせず、「実際私たちは、今は鏡において謎」のようなかたちを見ているが、しかしその時には、顔と顔を合わせて「見るであらう」(Iコリント一三・一二)という終末における主の姿の視認、主との交わりから理解しようとする。この傾向を助長している原因としてThWにおける *evθnēōs*、*ekθnēōs* の解釈と解説が挙げられよう。以下、ThWの明確な問題点を概観した。

## 二 『新約聖書神学語句事典 (ThW)』における *evθnēōs*、*ekθnēōs* の問題点

新約聖書の神学語句事典である ThW は *evθnēōs* Grundmann が担当した動詞 *evθnēōs* 「住む」、*ekθnēōs* 「離れる」の項目では明らかな問題点が存在する。まず第一点として、ThW は *evθnēōs*、*ekθnēōs* の用例が LXX だなことは指摘しているが、*evθnēōs* は新約聖書においてIIコリント五・六、八、九のみ、*ekθnēōs* もIIコリント五・六、八、九のみに *hapax legomena* であることに全く言及していない。次に Grundmann は、これらの語彙の過去における用例としてプラトン、ヘロドトス、フラビウス・ヨセフなどを挙げているが、パウロとはほぼ同時代に活躍したアレクサンドリアのフィロンが

*evθnēōs*、*ekθnēōs* の語を彼の著作において用いていること、また二世紀のエジプトにおけるヘレニズムユダヤ教の著作と推測される「アブラハムの遺訓」一五にも *ekθnēōs* の用例があるにもかかわらず両者の用例を無視している。更にはThWの解説において、パウロ、コリントの論敵、フィロン、「アブラハムの遺訓」の思想的な関連とその影響について全く言及していないことが挙げられよう。また、ThWにおける *evθnēōs*、*ekθnēōs* の項目は、IIコリント五・六一九の内容を説明しているが、Grundmann は *evθnēōs*、*ekθnēōs* の語彙が新約聖書における *hapax legomena* であることを注意を割いておらず、フィロン「アブラハムの遺訓」の用例にも触れていないことから、パウロは *evθnēōs*、*ekθnēōs* の語を論敵が存在しない文脈で自らの語彙として用いたという前提でこの項目を解説している。Grundmann のこのような極端な傾向は、Windisch がIIコリント書の註解において「原始キリスト教の風潮と期待は、天国が安定した場、つまり故郷であり、キリスト者は地上をまるで外国に居るように感じ、また主のもとへの出発を待望するというプラトンの望ましい出発であるという見解はギリシャ・ヘレニズム的である」と述べ、プラトン、フィロンの用例を紹介したことに對する反発が原因であろう。Grundmann は「Windisch が述べるパウロのヘレニズム化は間違いだ」とし、パウロの主な関心はキリストとの交わりでありこの段落における類似は形式上の

意味を持つにすぎないとしている。確かにプラトンの用例はヘレニズム的と言えるが、フィロンはプラトンの用語と思想を旧約聖書の解釈と融合させているのでフィロンをヘレニズム的思想家と捉え、ヘレニズムユダヤ教との関連を問わない Grundmann の認識には問題がある。

この点の背景から Grundmann は「身体のうちに住んでいる者は、主から離れている」(II コリント五・六 b) という叙述をパウロの発言として肯定的に解釈しており、彼によれば II コリント五・六 b には①身体的存在は主から離れている、②主との十全な交わりは身体的存在の外部でのみ可能である、という二つの概念が述べられており、パウロ及びキリスト者は身体的領域という主とは異なる領域に属しているので、身体から離れることで身体的世界の領域から主のもとに移行し、主と十全な交わりが可能となるとしている。

また Grundmann の解釈の重点は、主との交わりを *separately* *δια* *εἰδός* 「見えるものによつて歩むこと」と述べていることであろう。つまり、彼は II コリント五・六以下にコリント人のスローガン、パウロによる論争的文脈、フィロンの影響を全く認めていないので Grundmann は「私たちは身体的領域に住んでいる限り主から離れていることを知っています」(II コリント五・六)、何故ならば「終末時に目に見えるキリストの姿 (*εἶδος*) によらず、信仰 (*πίστις*) によつて歩んでいるからです」(II コリント五・七) と「信仰」における歩みが、身体

に留まりキリストから離れている原因であると先ほどの O'Connor とは真逆の解釈をしている。

このように七節の *εἶδος* をどう解するかで正反対の見解が生じる。ThW は七節における *εἶδος* の用法について説明している。この項目を執筆した Kittel は、七節の *εἶδος* を能動的な意味の「視力」ではなく受動的に捉えて「Gesalt (姿、形)」と理解すべきとしている。そして Kittel は、この「Gesalt」は、キリスト者が来るべき世においてのみ見ることが出来る「主の *εἶδος*」であると II コリント一三・一二における「だがその時には顔と顔を合わせて見ることになる」という箇所を典拠に主張している。確かに七節は Windisch が「I Korinther 13, 12」の縮小と説明であり *δια* *πίστεως* は *δι' ἐσώτηρον ἐν ἀκτινῶν. ἂν ἐκ λέγοντος* に、*δια* *πίστεως* は *πρόσωπον πρὸς πρόσωπον* に相当し両方の箇所は民数一二・八を基礎としていると指摘するよううに、七節の背景には民数一二・八と II コリント一三・一二がある。問題は対立概念として述べられている *πίστις* と *εἶδος* をどう捉えるかであるが、Kittel は *εἶδος* を終末的な目に見える「主の姿」とし、一方で *πίστις* は終末的な完成である *εἶδος* に属するまでの「暫定的なもの」とすることで両者を肯定的に理解している。ただし Kittel が七節において *πίστις* と *εἶδος* の対立概念を肯定的に扱う解釈は、両者が強く結合していないことから強引過ぎるくらいがあることを認めており、抜けどとして「我々がもし、この言及はその十全で適切な意味において、八節

の主のもとに住む時代に属しているキリスト者の姿に対してのみ述べられたものであるという代替案の見解を受容すれば矛盾は解消されるとしている。このように ThW は、七節の εἶδος を目に見える「主の姿」、更には「終末時におけるキリスト者の姿」であると述べており、パウロは七節において目に見える εἶδος より目に見えない κτῆνος に重点を置くという捉え方やパウロの論争的筆致には触れていない。

では他の註解者たちは ThW の解釈に従っているかと言うと必ずしもそうではない。七節の εἶδος は、大きく分けると一、能動的に「見る」と「視力」と捉える解釈（民数一二・八、ヨハネ二〇・二九、イペトロ一・八が根拠）と二、εἶδος を受動的に「形相」、「外觀」、「見える姿・形」と捉える解釈がある。

一の解釈は、Lietzmann, Kimmel, Bruce, Martin がしており特に Martin は εἶδος を信仰者の「視力」と結びつけている。この解釈では、キリスト者は現在の生においてキリストと共に信仰的関係を持っているが、彼らはキリストと顔と顔を合わせることが出来ない。そして、この意味において彼らはキリストの存在から離れており、II コリント五・六における「身体に住んでいる限り、主から離れている」という主張と合致すると理解される。

次に二の解釈では、εἶδος を II コリント四・一八で言及されていた「見えるもの」と解し、εἶδος「見える姿・形」は、現在我々が存在する世界であり、その世界は聖霊の恩恵を奪われた物質

の世界で、ὁ κτῆνος εἶδος は六節の τὸ πνεῦμα αἰῶνος に平行するとする解釈 (Baumert<sup>(23)</sup>)。或いは、パウロが彼の使徒職に疑義を唱えていた人々に応答しているだろうという視点から、パウロの使徒職に疑義を唱える人々は、信仰によって導かれるのではなく、パウロ自身の εἶδος、つまり彼の外見に注意が向けられており、ὁ κτῆνος εἶδος は、未来ではなく現在に関連している。何故なら ὁ κτῆνος εἶδος は ὁ κτῆνος と対照せられており、I コリント一三・一三では信仰は現在のみならずまた未来にも属するものだからである、という解釈 (Furnish) があり、意外なことに εἶδος を受動的に解する Baumert と Furnish は、κτῆνος と εἶδος を鋭く対立させ、目に見える εἶδος を否定的に解している。他方で Baur と Thall は Kittel の系譜に位置しており、Baur は Kittel の解釈に従って εἶδος を II コリント四・一七における「永遠の栄光」と結びつけている。Thall は、εἶδος を地上に住む信仰者たちには見ることが出来ない天上に住む栄光のキリストの姿とし、また信仰者たちは信仰の基盤においてのみ主と結びつけられている、と解している。ただし、Baur と Thall は、Kittel の解釈に従いながらも εἶδος を終末時におけるキリスト者の姿とは解していない。以上のことから、εἶδος の解釈については註解者たちによって幅があり、必ずしも ThW を踏襲しているわけではない。ただし、七節では創世三三・三〇と民数一二・八に依拠した I コリント一三・一二が前提とされているので εἶδος の中に「しかし、その時には顔と顔を合わせて」(見るであ

らう」という終末時におけるキリスト者とキリストとの対面またはキリストの姿が含まれていることは考慮すべきであろう。しかし、パウロ自身が εἰδός の語彙をどう捉えていたかという問題があり、パウロは自らの書簡において εἰδός を「テサロニケ五・一二」でしか用いておらずそこでは「あらゆる悪の形」(παντός εἰδός πορνῆς)と否定的な意味で述べられている。また「コリント一三・一二」の背景である LXX 創世三三・三〇と民数二二・八の両箇所において、εἰδός が神の顔、主の姿として用いられているにもかかわらず、パウロは「コリント一三・一二」では εἰδός の語彙を用いていない。パウロの εἰδός に関する消極的な姿勢から、論者は七節の εἰδός に終末的な主の姿が含まれていることは認めつつ、同時に εἰδός には「コリント書でしばしば問題とされたコリント教会に「推薦状」を携えて自らの使徒職の正統性を主張した人々への批判が重ねられている(「コリント三・一―二、五・一二、一〇・一八」と解したい。「推薦状」を携えた者とコリント教会の論敵はパウロとその信奉者を「肉に従って歩んでいる」(κατὰ σαρκὰ περιπατοῦντες)と非難したようであり(「コリント一〇・二」)、七節の「目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいる」という叙述は、「推薦状」と「パウロたちへの非難」に対する論争的筆致とも読めることから、手放した εἰδός を肯定的に捉える Kittel と Grundmann の解釈は一面的ではあまい。Grundmann は、foris より εἰδός に重きを置くので、主との十全な交わりは「顔と顔を合わ

せた関係である」(「コリント一三・一二」という終末時におけるキリストとの対面が前提とされ、キリスト者はその時々の領域(εἰδός)において主と十全に交わり完成される。しかし Grundmann は、主と交わり完成するにはキリスト者が身体を離れて「外国(キリストの領域)への旅の決心」をしなければならぬと、彼自身が否定したパウロのヘレニズム的理解を条件としている。これを形式上の類似と片づける Grundmann の説明は不十分である。

### 三 フィロンと『アブラハムの遺訓』における

ἐκδημιόω, ἐκδημιόω の用法

我々は、フィロンと『アブラハムの遺訓』における ἐκδημιόω, ἐκδημιόω の用法を無視した Grundmann の恣意的な解釈を概観したが、フィロン、『アブラハムの遺訓』の用法を確認する前に、ἐκδημιόω 「住む」、ἐκδημιόω 「離れる」という動詞の意味について考察したい。

ἐκδημιόω は「より一般的な ἀποδημιόω と同じ意味であり、形容詞 ἐκδημιόος (ἀποδημιόος) 「家から離れた」、旅に出た」= ἐκ (ἐξ) 「くから離れて」―δημιός 「民衆、群衆」に由来し、「家から離れる」、外国へ旅に出る」という意味を持つ。その ThW は、フィロンの著作にもその用例が見られることについては言及してはなかったが、同様にほとんどの註解者は、フィロンの ἐκδημιόω、

ἐκθίμωの用法を紹介していなから (Plummer, Bruce, Barrett, Thral, Matera, Harris)。II コリント書の註解書では Windisch が、フイロンの『律法詳論』IV 一四二に ἐπιθήμω' ἐκθίμωの用法があることに言及しており、また II コリント五・六以下で用いられている語句の思想的背景はプラトンのフイロンのなへレニズム思想と関連があることを指摘している。我々は、Thw と Windisch が触れていなからレニズムユダヤ教における ἐπιθήμω' ἐκθίμωの用法を確認したい。

ἐπιθήμω「任む」であるが、この用語は、フイロンの著作において『律法詳論』IV 一四二に一回しか用いられていなから。次に ἐκθίμω「離れる」は、『アブラハム』六五に二回、『律法詳論』IV 一四二に一回の用法があるので、まずは『律法詳論』IV 一四二の用法を確認しておこう。

そこで家から去る人たちは、或いは家に留まる人たちは、市民たちや見知らぬ人たちと同様に (οἱ ἐν ἐκθίμωτες καὶ ἐπιθήμωτες, dorai kai ξενοι)、門の表面に刻まれた碑文 (ἑπιθήμω) を読むであらうし、また彼らが言うべきことを永遠の記憶に留め、同様に不正を許さず行わないということに注意するであらう。 (『律法詳論』IV 一四二)

『律法詳論』IV 一四二では、各々の家の門にモーセの律法が刻まれており、家に入入りする人たちは、この碑文の律法を読むことから、各々が正しく話し、行うことを心に留めることが述べられているので、II コリント五・六以下の「この身体のうち

に住んでいる限りは、主から離れて住んでいる」という議論とは直接関連しない。ただし、ἑπιθήμω「文字、碑文」という語は、II コリント三・七においてモーセの顔に関する栄光と石に刻まれた文字の文脈で用いられていることから、この関連は別の機会に問いたい。では、次に『アブラハム』六五における用例を確認しよう。

何故ならば、家に滞在する人々は、家から離れている人々に対立し、同様に盲目の人々は、鋭い視力の人々に対立するからである (ὁμοῖοι ἅπα ὁμοῖοι βλάπτωτας ἀναποθήμωτοι ἅπα' ἐκθίμωτες)。(『アブラハム』六五)

Thw とほとんどの註解者は、『アブラハム』六五に ἐκθίμωの用法があるにもかかわらず沈黙を守っている。『アブラハム』六五では、収入のため商業的目的で旅を続けている人々は、外国の光景を見て財政上の利益とは別に彼らが以前に知らなかった諸々の事柄に関する知識を獲得すること、魂に利益と喜びを提供することが、彼らを外国に滞在させるよう駆り立てていると述べている。この文脈で「家に滞在する人々 (ἀναποθήμωτοι)」と「家から離れている人々 (ἐκθίμωτες)」、「盲目の人々 (ὁμοῖοι)」と「鋭い視力の人々 (βλάπτωτες)」が対置されており、「家に滞在する人々 (ἀναποθήμωτοι)」と「盲目の人々 (ὁμοῖοι)」は家に引き籠り広く世の中を見ないことから外部の知識を獲得し自らの魂を向上させない人々を象徴し、「家から離れている人々 (ἐκθίμωτες)」と「鋭い視力の人々 (βλάπτωτες)」は

積極的に外部の知識を取り入れ自らの魂を向上させることに喜びを感じる人々とされる。『アブラハム』六五において身体から離れるという叙述はなかったが、O'Connor はフィロンにおける「盲目の人々 (τυφλοί)」と「鋭い視力の人々 (βλέποντας)」という視力に関連した対置は、II コリント四一八「目に見えるもの (τὰ βλεπόμενα) は一時的で、目に見えないもの (τὰ μὴ βλεπόμενα) は永遠である」という対置とII コリント五・七「見えるものではなく、信仰により歩む」(ὁ δὲ πνευματικὸς γὰρ respicitur οὐ βλεπόμενος) と「目に見えるもの」(εἶδος) との対置に関連を見出している。

実際、フィロンにおいて視力は徳に關係している。一方、フィロンの盲目 (τυφλός) という語彙は、被造物における束の間の外形に夢中になる感覺的知識を特徴付けている。

徳のわずかな粒が、価値ある希望によつて輝き燃え上がる時、それはしばらくの間閉じられまた盲目であつた目を開いた。(『アブラハムの移住』二二三)

魂の中には血族關係におけるような男性的要素と女性的要素があり、男性的要素は男に相当し、女性的要素は女に相当する。男性の魂は、それ自身を万物の原因で宇宙の創造者で父なる神にのみ譲渡する。女性は、生まれまた消滅するといふすべてにまといつく。女性は、その機能を道すがらやつてくるものを盲目的に掴む手のように伸ばし、また、神聖な秩序、不変のもの、祝福されたもの、三倍の幸

福の代わりに無数の変化や変移と共なる被造物の世界に対して愛着の留め金を与える。(『律法詳論』III一七八)

またフィロンは εἶδος の語を目に見えないイデア的な存在としても用いている。

そこで、目に見えない形相と質量によらないものにより(生成され)、不可視的に描かれ、また形づくられた原型のしるしが預言者の心に刻印された (ὁ μὲν οὖν τύπος τοῦ προφητικῆς εὐεσφρητίστο ἢ διανοία τοῦ προφήτου διασφρητισμένος καὶ προδιαμαρτυμένος ἀφ' ὧν ἀνὰ δόξας εἶδεν.) (『モーゼの生涯』II七六)

このようにフィロンにおいて「ἐκδημία」と「視力の問題」と「εἶδος」は関連しているが、O'Connor のようにコリント人たちはフィロンの教説に影響され鋭い視力、すなわち高い認識力を誇っており、パウロはII コリント五・七で彼らの自負は自惚れであると批判しているとする見解は、可能性はあるにせよ少々読み込み過ぎであろう。

では、最後に『アブラハムの遺訓』における ἐκδημία の用法を確認しよう。

「シカエルはアブラハムに言った。」あなたが持っているものすべてを整理しなさい。と言つるのは、あなたが身体を離れて、更にもう一度主の御許に来るべく定められた日が近づいたからです (κοινωνοὺς διαστάειν περὶ πάντων ἔχοντας ὅτι ἤγγικεν ἡ ἡμέρα ἐν ᾗ μέλλεις ἐκ τοῦ σώματος ἐκδημεῖν καὶ

ἐν δυνάμει τοῦ κτίσματος ἐργασθεῖται。」

（「アブラハムの遺訓」一五）

『アブラハムの遺訓』一五において ἐκπέμψα は、アブラハムが死を迎える際、身体から魂が離れて主の御許に行くことが述べられている。『アブラハムの遺訓』一五では、動詞の用法においても思想的にも II コリント五・六一八と強い関連が見出される。問題は『アブラハムの遺訓』が成立した時期とならう。諸説を統合すると『アブラハムの遺訓』は凡そ紀元後七五〇〜一二五年の間に成立したと考えられている。『アブラハムの遺訓』には、エジプトの要素、ユダヤ教的要素、キリスト教的要素が確認されることから、エジプトにおいてユダヤ人の手によって執筆されたことは定説であり、II コリント書が執筆された紀元五〇年代よりも後代に成立した文書となる。よってエジプトでは、フィロンより後の時代においても死後、魂が身体から離脱することが伝統的に説かれていたことが窺がえる。しかし、後代に成立した文書から II コリント五・六一八との思想的背景を問うことには慎重にならざるをえない。

これまで ἐκπέμψα、ἐκπέμψα の用法をフィロンの著作、『アブラハムの遺訓』から確認したが、ἐκπέμψα、ἐκπέμψα に関しては、明確に II コリント五・六一八と合致する用例は見られなかった。

しかし、「身体を離れ主のもとに向かう、主のもとに住む」という思想はフィロンの著作において顕著に確認される。O'Connor

によると、コリント人たちはフィロンの「あなたは自分の住まいを変えてあなたの父の土地に行かなければならない……そしてその土地とは知恵である」（『アブラハムの移住』二八）、「天の神聖な魂は……地上の領域を離れ、上に引き上げられ、神的な性質と共に住む」（『神の不動性』一五一）という見解を与えられていたと主張している。コリント人たちがフィロンの教説をここまで熟知していたとする O'Connor の主張はここでも読み込み過ぎであるが、フィロンの著作には O'Connor の指摘以外にも、思想的に II コリント五・六一八と合致する箇所がいくつか見出される。

地上のものから立ち去り、汚れた墓である身体から逃れ、いわば牢獄の看守である身体の欲望から脱却するようにしなさい。

（「アブラハムの移住」九）

この地上の生からの旅立ちに努め、魂は身体的なものから分かれたれ、魂が死ぬべきものから解放され、魂が体を立ち去り、体から自由になるならば、神に関して正しい見解を得ることが出来るようになる。

（「アブラハムの移住」一九二）

『アレゴリカルな説明』III 四一—四二では、「魂にとって、身体を立ち去って五感から逃げ出すことが良いことである」。また、創世四・七を根拠に「身体と死ぬべき種族の中に住む者は (τὸν κτιστικόντα ἐν σώματι καὶ τῷ θνήσκοντι)」神と共に生きることが不可能であり、ただ神が牢獄から解放した人だけが、

神と共に生きることが出来る」と説いており、この箇所は思想的にIIコリント五・六一八と極めて近い。

## 結論

IIコリント五・六一八とフィロンの著作の間には、思想的に緊密な類似が確認されるが、奇妙なことに多くの註解者はこの類似から目を背けたがっているようである。また今回の論考を通して、従来の研究者は、フィロンとの関連についてかなりいい加減な考察をしていることが判明した。例えば、Pummerは自らの註解書において、IIコリント五・六一八とフィロンの思想が近似している例として『アレゴリカルな説明』III一四を挙げているが、この箇所はモーセとエジプトの王ファラオについて述べられているだけで、身体からの脱却や主のもとに住むということに関しては言及されていない。おそらくPummerは『アレゴリカルな説明』III四一としたのであろう。同様にBruceもフィロンの「外国における逗留」を表す *trōphika* の用法に関して、正しい箇所は『神のものの相続人』二七六であるが、二六七と誤記している。このような誤記は、フィロンとの関連を真剣に考察する O'Connor にも見られ、彼は *evōgeliōs' ekōnēōs* がフィロンの『律法詳論』IV一三二において対として用いられていると述べているが、正しくは『律法詳論』IV一四二である。このようにフィロンとの関連箇所にも誤記が確認され、

また放置されたままの現状を鑑みると従来の新約聖書学はパウロとフィロンの関連に無関心であるか、意識的に避けてきたことが窺がえよう。

特に ThW におおむね *evōgeliōs' ekōnēōs* の項目を担当した Grundmann は、*evōgeliōs' ekōnēōs* が新約聖書における hapax legomena であり、パウロ書簡においてIIコリント五・六一九のみに用いられていること、同時代の思想家フィロンにその用例が確認されることに触れていないことは極めて問題である。Grundmann が新約聖書における *evōgeliōs' ekōnēōs* の特異性に触れたがらない理由として、彼はパウロのヘレニズム化という理解を頭から拒否する恣意的な前提が存在するからであろう。しかし、Grundmann の最大の難点は恣意的な解釈ではなく、フィロンをヘレニズムの系譜に位置付けヘレニズムユダヤ教の思想家とは解しないことであろう。これは Grundmann のパウロに対する捉え方にも当てはまる。Buttmann もパウロをパルステイナユダヤ教の系譜から理解したので、パウロはIIコリント五・一以下において身体を肉体的なからだとして軽視するヘレニズム的・二元論的な身体軽視に影響されたと主張している。Grundmann はこの影響を認めたくないために、IIコリント五・六一八の類似は形式上の意味を持つのみであると恣意的で一面的な解釈に固執しているのであろう。しかし、パウロ自体がヘレニズムユダヤ教の出身であるので、今後フィロン、『アブラハムの遺訓』『知恵の書』といったヘレニズムユダヤ教との関

連を問う考察が必要となるだろう。

今回の考察を通して、パウロはフィロンの教説や言葉を熟知した上で、自分の主張の中に組み込んでいるものと考えられる。コロント三章一五章にはフィロンの教説、特に比喩的な解釈が確認されるので（コロント三・七、四・七、一六、五・一―一四）、今後の課題としてこれらの関連を問いた。またコロントの教会にフィロンの教説がもたらされた経緯を「メンツァンドリアの出身者ではないわゆる解放された奴隷の会堂に属する人々」（使徒六・九）がエルサレム教会に居たという記述と使徒二四―二八のアポロ伝承を手がかりとして進めたい。

## 註

- (1) *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament* in Verbindung mit Otto Baernteind ... [et al.]; herausgegeben von Gerhard Kittel, Stuttgart: W. Kohlhammer, c1933-c1979.
- (2) W. Schmithals, *Die Gnosis in Korinth*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965, S. 232.
- (3) 青野太潮「第IIコロント五章一―十節に於けるパウロと彼の論敵の思想について」『聖書学論集』九号、日本聖書学研究所、山本書店、一九七二年、三七七頁。
- (4) 青野太潮、前掲書、三七八頁。
- (5) 筒井賢治『メノシス古代キリスト教の〈異端思想〉』講談社選書メチエ、二〇〇四年、一八四頁。
- (6) H. Windisch, *Der zweite Korintherbrief*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1924, S. 166.
- (7) Jerome Murphy-O'Connor, "Being at home in the body we are in exile from the Lord" (2 Cor 5:6b)", *RB* 93 (1986), pp. 219-220.
- (8) J. M. O'Connor, *Ibid.*, pp. 217-220. 青野氏の「パウロはパウロから離れたところのなごみの伝を放逐やせりことによつて論敵によつて否定的に語られた内容を肯定的に言えたい」と指摘している。青野太潮、前掲書、三七八頁。
- (9) R. Bultmann, *Theologie des Neuen Testaments*, Tübingen 1953, S. 189-199.
- (10) 青野太潮、前掲書、三十九頁。
- (11) A. Plummer, *A critical and exegetical commentary on the second epistle to the Corinthians*, Edinburgh: T & T Clark, 1915, p. 151.; C. K. Barrett, *The Second Epistle to the Corinthians*, London: A & C Black, 1973, p. 158.
- (12) C. K. Barrett, *The Second Epistle to the Corinthians*, London: A & C Black, 1973, p. 158.
- (13) M. E. Thrall, *A critical and exegetical commentary on the second epistle to the Corinthians*, v. 1, Edinburgh: T & T Clark, 1994, pp. 386-389.



- (38) E. Janssen, *Testament Abrahams*, in *Jüdische Schriften aus hellenistisch-römischer Zeit* III-2, Gütersloher 1975, S. 198; 関根藩三『アブラハムの遺訓 聖書外典偽典補遺 一』教文館 一九七九年 三三〇頁。
- (39) E. Janssen, *Ibid.*, S. 199; 関根藩三『前掲書』三一九頁。
- (41) J. M. O'Connor, *The theology of the second letter to the Corinthians* (NT Theology), Cambridge: Cambridge University Press, 1991, pp. 53-55.
- (42) A. Plummer, *Ibid.*, p. 154.
- (43) F. F. Bruce, *Ibid.*, p. 205.
- (44) J. M. O'Connor, "Being at home in the body we are in exile from the Lord", p. 218 n. 10.